

## 【巻頭言】

## 被服衛生学と出逢って

潮田ひとみ

東京家政大学家政学部

私が「被服衛生学」の存在を初めて知ったのは、1985年大学2年生の時である。高校生の時、全国の大学、学科でどんなことをやっているのかを大学ガイドで読んだ。その中で、面白そう!と思ったのは、千葉大学工学部と九州芸術工科大学だった。その頃の私は人間工学が勉強したかったらしい。しかし、学びたいことと将来の夢は一致するわけではなかった。当時の私の将来設計は、稼ぎの良い伴侶を得て、楽そうな大学に勤め、スポーツカーに乗って、子どもを幼稚園に連れていったあと、勤務する大学に重役出勤することだった。工学部に行ってしまうと、15年後の私にはこの道は多分ない。楽そうな大学に勤めるためには家政学部に行くのがよろしいはず。学びたいことと将来の夢が異なるのなら、将来の方が大事であると思った私は、化学が勉強できて、動物実験はしないところという消極的なのか積極的なのかよくわからない理由で、家政学部被服学科に入学することを決めた。

私が入った大学には、被服衛生学講座はなく、大学2年生になったときに、被服衛生学に出会った。非常勤講師として吉田敬一先生が来てくださった。体温調節ってなんて面白いのかしらと講義を聞いた。3年生の時、中島利誠先生の研究室の卒業研究の被験者となり、こういう実験も面白いなあと思っているところで、非常勤講師としてお越しになった會川義寛先生の物理化学を受講した。ヒトの体温調節反応を物理化学・熱力学として扱うことに感動し、テキストの巻末の問題を1章2問ずつ解答して提出するところを、よくわからない使命感にかられ全問解答して提出した。

この時の感動が大きく、中島利誠先生に卒業論文を指導していただくことになった時、温熱生理学の実験もやりたいが、あわせて、物理化学もとても面白いと思ったので、数値的な取り扱いもやってみたいと主張した。同じことを学生に言わ

れたら、私は「百年早い。生意気言うな!」と激怒する自信がある。しかし、中島先生は、「それなら、被服衛生学部会で採択された科研のテーマがある。サーマルマネキンを使って防護衣のclo値を測定することになっているから、それをやろう。」と提案してくださった。そして、「田村照子先生にサーマルマネキンの使い方を教えていただきなさい。」と送り出してくださった。身の程知らずにも程があり、思い出すと精神性発汗が起こるが、訪問時に田村先生からいただいた別刷りは今でも私の宝物である。

また、大学院に入り、被服衛生学特講(非常勤講師: 入来正躬先生)の「体温測定だけで90分話しましたが、一日でも話すことができます。」の言葉にも感嘆した。前後して横浜で開かれた被服衛生学部会セミナーに出席した時に、実は、学びたかったけれど進路変更したはずの道に進みつつあることに気付いた。

被服衛生学部会では、それなりに居心地よく過ごしてきた。年次大会・セミナーに参加して刺激を受け、頑張ろうと自分に気合をいれながら帰ること、終わってから研究のことを肴にお酒と一緒に飲むこと、高校生の時には想像できなかったことが、実に楽しいことを知った。

被服衛生学の学徒として過ごす日々も後半戦に入り、夢がかなったか、これでいいのかと悩む暇もない日々が続く。巻頭言としてどうなのかと思いつつ記した。来年度は、年次大会も被服衛生学セミナーも対面で実施できそうである。部会を通じて、皆様から刺激を受けて、よし!頑張ろう!と思いたい。まずは板橋でお待ちしております。

## &lt;連絡先&gt;

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1  
東京家政大学家政学部服飾美術学科 潮田ひとみ  
TEL: 03-3961-8568 (研究室直通)  
Eメール: ushioda-h@tokyo-kasei.ac.jp